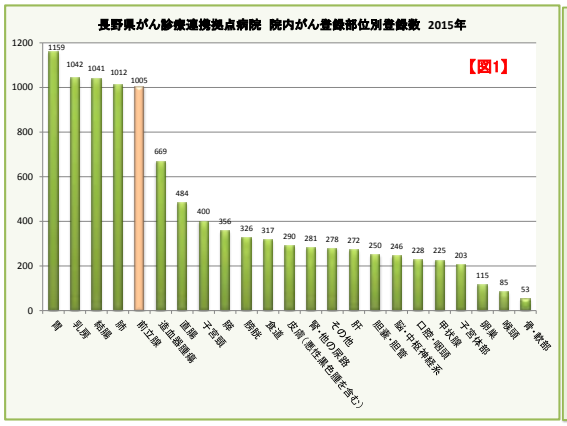
院内がん登録から見た長野県の前立腺がん

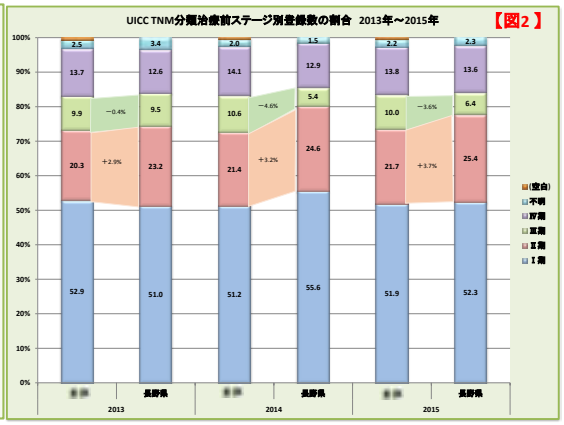
大槻 憲吾[1]　唐澤 芽唯[2]　野澤 早加[2]　齋藤 知子[2]　小泉 知展[1]
[1]信州大学医学部附属病院信州がんセンター　[2]信州大学医学部附属病院診療録管理室

【目的】

長野県の前立腺がんは、2015年症例で5番目の登録数である。【図1】

2012年頃からの手術支援ロボットの導入や強度変調放射線治療機器の拡大により、治療方法や治療実績の変化が考えられる。国立がん研究センターのがん診療拠点病院院内がん登録2015年全国集計報告書（以下2015年報告書）と長野県がん診療連携拠点病院の院内がん登録データ（以下長野データ）を解析することにより、長野県の前立腺がんの特徴と治療状況の年次推移を考察する。





【方法】

2015年報告書と長野データを調査対象とした。2015年報告書の集計施設427施設（以下全体）と長野県のがん診療連携拠点病院のUICCTNM分類治療前ステージ（以下cステージ）、UICCTNM分類総合ステージ（以下fステージ）別登録数の割合や治療方法を比較した。詳細な変化を見るために、長野データより施設別治療方法の経時的推移を分析した。

【結果】

2013年～2015年のcステージ別登録数の割合では、長野県は全体に比しⅡ期は多く、Ⅲ期は少ない傾向であった。【図2】

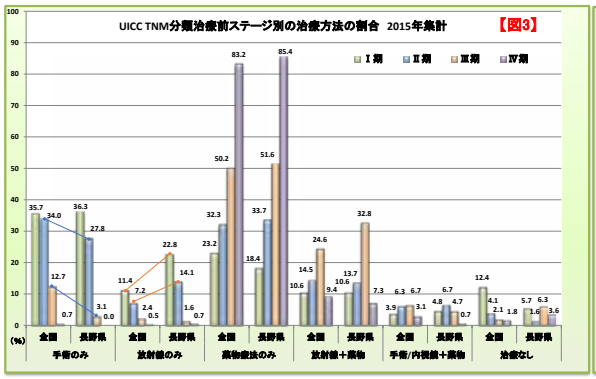
2015年のcステージ別の治療方法の割合で、長野県は全体に比し手術のみの、Ⅱ期、Ⅲ期は少なく、放射線のみのⅠ期、Ⅱ期が多い傾向があった。【図3】

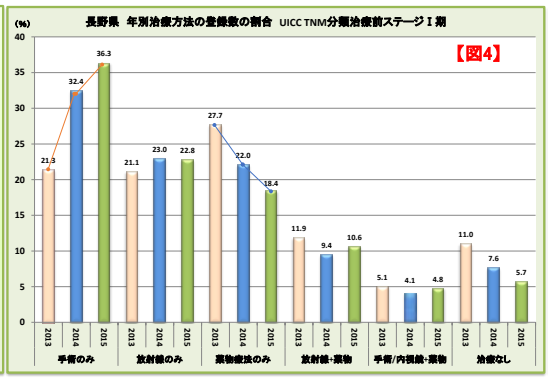
2013年～2015年のcステージ別治療方法のⅠ期では、手術のみは増加し、薬物療法のみは減少

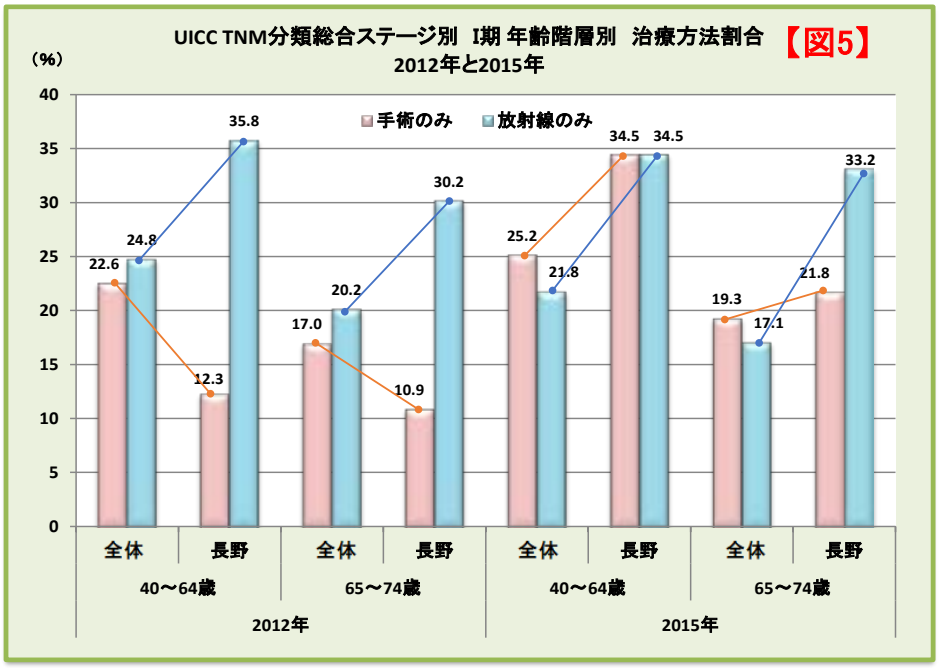
した。Ⅱ期も同様な傾向がみられた。【図4】

長野県と全体で、2012年と2015年のfステージ別年齢階層別のⅠ期の手術のみと、放射線のみを比べると2012年では40歳～64歳、65歳～74歳とも全体より手術のみが少なく、放射線のみが多い。2015年では、40歳～64歳で手術のみ、放射線のみとも多く、65歳～74歳では手術のみは若干多く、放射線のみが多い傾向であった。【図5】

長野県の拠点病院の2012年～2015年の手術のみの推移をみると、A病院が4.4倍、B病院が5.1倍、D病院が2.0倍となっており、いずれも手術支援ロボットの導入をした病院であった。【図6】





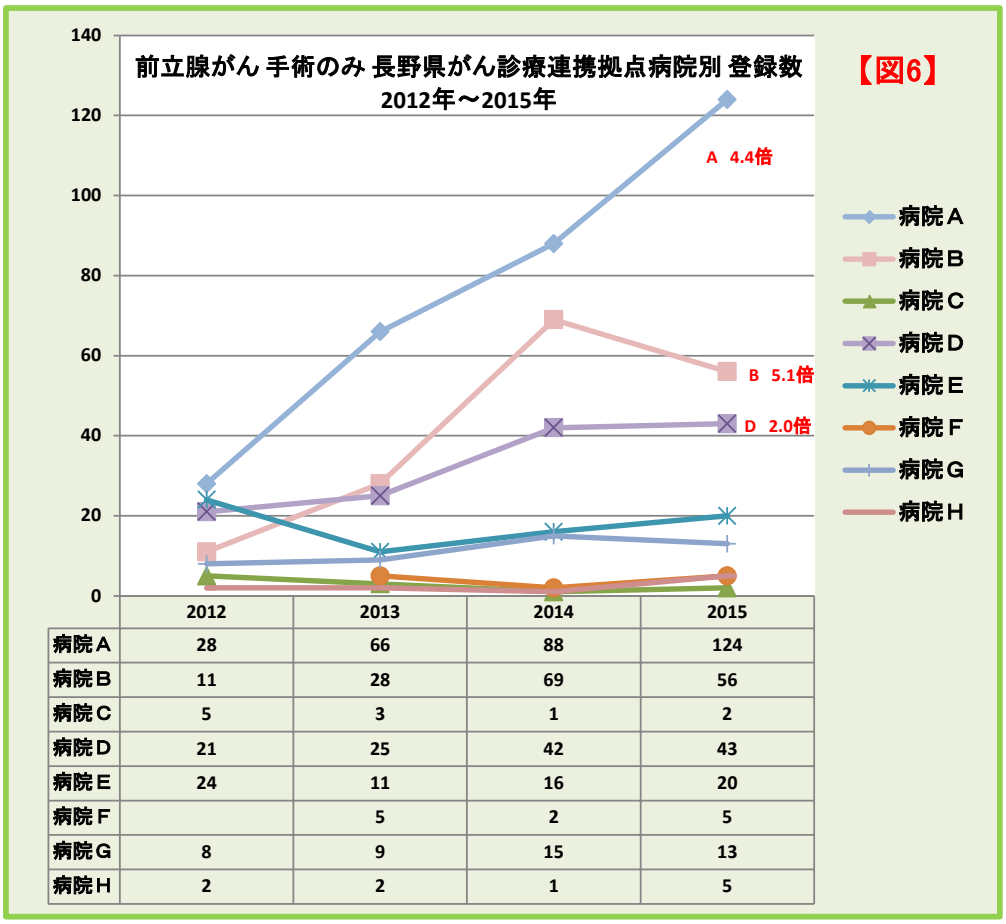
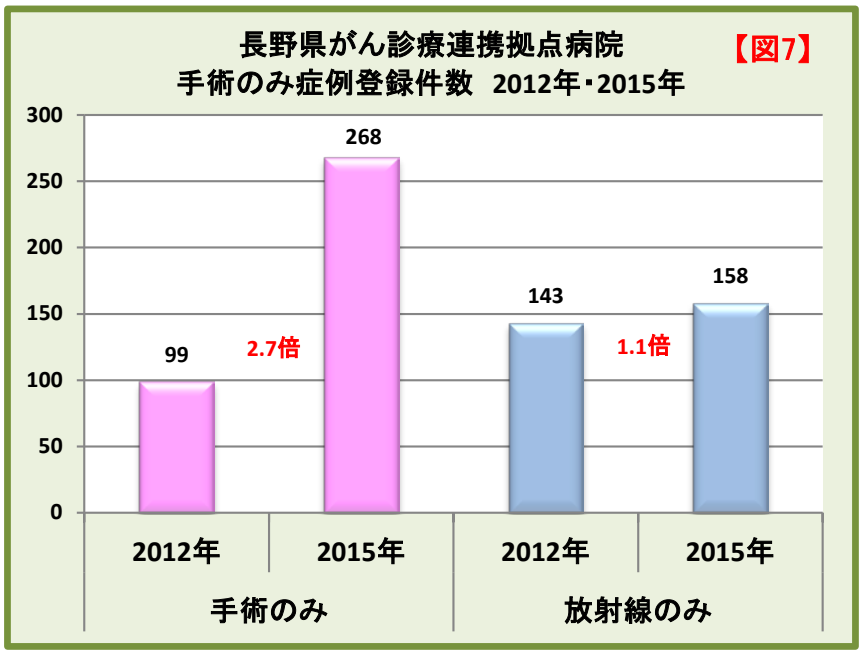


【考察】

今回の観察期間中、長野県の前立腺がんの手術のみが2.7倍と増加し、放射線のみは1.1倍である。【図7】

治療方法の登録数は手術のみが増加し、全体の治療方法の割合へと近づきつつある。手術支援ロボットを前立腺がんの治療に使用している3病院の手術のみの登録増加が、長野県の治療方法に大きな変化を与えている。放射線のみは、陽子線治療施設や強度変調放射線治療機器の拡大

もあったが、登録数に大きな影響は与えなかった。
長野県の前立腺がんの治療方法は、4年間で大きく変化をしている。このような変化と現状を、患者・家族、県民に広報し、治療方法の選択、治療施設の選択に役立つようにすることが重要と考える。



	2012	2013	2014	2015
病院A	28	66	88	124
病院B	11	28	69	56
病院C	5	3	1	2
病院D	21	25	42	43
病院E	24	11	16	20
病院F		5	2	5
病院G	8	9	15	13
病院H	2	2	1	5